

第3章 紀州徳川家の時代



海上交通の発展と紀州廻船

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

紀州廻船

大坂・江戸を結ぶ 幹線航路^{かんせんこうろ}を行き来する船^{かいせん}（廻船）が、紀州各地の港にたち寄りました。また、これらの港では、大小の廻船が活動していました。「紀州廻船」とは、大型帆船^{はんせん}によってつくられた日高^{ひだか}（御坊市）、比井^{ひい}（日高町）、富田^{とんだ}（白浜町）の紀州3か浦^{しらはま}の廻船をいいます。江戸への廻船は、1619（元和5）年に堺^{さかい}の商人が、富田浦から廻船を借り、大坂から江戸へ荷物を運んだのがはじまりで、のちの菱垣廻船^{ひがき}に発展したといわれています。



廻船絵馬（海南市柿本神社蔵）

1667（寛文7）年日高川^{かこう}河口^{その}の藪^{やぶ}に29艘、御坊^{ごぼう}に17艘、名屋^{なや}に16艘と日高川河口付近に廻船集団がつくられていました。また、1678（延宝6）年には、比井にも7艘の廻船が見られました。

紀州廻船は、もともと日高組が中心で、比井・富田^{おおかわ}・大川（和歌山市）までまとめていましたが、1707（宝永4）年、西宮^{にしのみや}（兵庫県）に酒積問屋^{ひょうご}ができると、比井廻船が日高組から離れ、樽廻船^{たる}として酒荷^{さか}の輸送をはじめました。一方、日高組は、菱垣廻船^{とうゆ}といって薬種類、灯油、鉄などを輸送しました。

宝暦年間^{ほうれき}（1751～1764）には、日高廻船も比井廻船とともに樽廻船^{かつやく}として活躍^{めい}していますが、明和年間^{めい}（1764～1772）には、樽廻船の大半を紀州廻船が占めていました。

1833（天保4）年に紀州廻船は、樽廻船から離れ、菱垣廻船へまとめられます。それまで最盛期^{さいせいき}に160艘ほどあった菱垣廻船は、樽廻船との積荷競争^{おとろ}に負けて30艘ほどまで衰えていました。灘^{なだ}・西宮（ともに兵庫県）の酒造家が自己資本で船をつくりました。廻船への出資^{しゅっし}によって酒樽運賃^{さかだるうんちん}を安くすることができたからです。また、菱垣廻船を再びさかんにするために紀州廻船との合併^{がつぺい}もしました。

新宮・鵜殿廻船など

17世紀中ごろに熊野川^{くまの}の河口^{しんぐう}に新宮廻船^うと鵜殿廻船^{どの}がありました。新宮廻船は50～60艘あり、おもに新宮^み・三輪崎^{わさき}から炭^{すみ}、木材を江戸・大坂へ運んでいました。船主は木材関係の経営者が多く、やといの沖船頭^{おき}に運送を任せていました。鵜殿廻船はやや小型の船が30艘ほどで、船主が船頭をつとめるやり方が多

かったようです。両者は江戸時代をととして熊野の木材などを江戸や大坂へ運んでいました。

石見（島根県）の浜田外ノ浦に入港した廻船を記した「諸国御客船帳」によると、1752（宝暦2）年から1866（慶応2）年の間に入港した紀州の廻船には、和歌山から新宮にかけての23か浦に籍を置く廻船がみられ、いずれも500～1,200石積みこくの大型船です。こうした記録からも、紀州の廻船の行動範囲の広さを知ることができます。

年貢米・特産物の輸送

伊勢（三重県）には、白子・松坂・田丸の紀州藩領が18万石余りあり、ここで徴収された年貢米は、和歌山・江戸・大坂へ輸送され、紀州藩の重要な財源ざいげんとなりました。輸送にあたる船には「紀」の字の印を掲げることが義務づけられました。紀州廻船も多く伊勢米を運ぶ御用船に参加していました。

紀州には、みかん・ろう・総・漆器・酢・醤油・炭・木材など多くの特産物とくさんぶつがあり、これらは廻船で領外の市場へ運ばれました。

1851（嘉永4）年有田川河口の北湊（有田市）へ集まったみかん船は、記録によると10月14日から翌年1月17日まで延べ53艘です。淡路船が27艘、大川船7艘、周参見船7艘、和歌山船3艘、日高・比井・富田など8か浦の船が各1、2艘となっており、このころになると、日高廻船が衰退してきただけがわかります。

文久年間（1861～1863年）の木本（熊野市）から積み出された熊野木材は、ほとんどスギ板で、1861（文久元）年25艘、同2年37艘、同3年26艘で、江戸送りが圧倒的に多く、日方（海南市）へは漆器の材

料、上方へは灘の酒樽の材料として送られました。江戸送りは伊豆（静岡県）・紀州・淡路（兵庫県）などの廻船が、日方送り、上方送りは紀伊の廻船が行っていました。

このように紀州の廻船は、江戸時代に日本列島を北から南にかけて港から港へと物品を運んでいました。



日方廻船 模型（海南市柿本神社蔵）



わかやまの知識



【紀ノ川と川上船】

広い紀ノ川平野を流れる紀ノ川は、物資を運ぶ大動脈でした。和歌山城下は紀ノ川を川船で運ばれてくる多種多様な物資によって繁栄しました。中流域の要衝橋本は300艘余の船継所ふねつぎでにぎわいました。この川船を「川上船」と呼び、橋本川船、粉河川船、和歌山川船と3所の船仲間があり、積み荷の協定を結んでいました。

紀ノ川には慈尊院（九度山町）や三谷（かつらぎ町）・麻生津（紀の川市）などに川港がありました。川上船で運ばれる登り荷は、橋本で荷揚げされ、陸路を高野山や五條方面へ運ばれました。川上船は人の移動にも利用しました。参勤交代の帰路橋本から和歌山まで川上船で下っています。